北の国のはなし

小川未明

青空文庫

あるところにぜいたくな人間が住んでいました。時節をかまわずに、なんでも食べたくなると、人々を方々に走らしてそれを求めたのであります。

「いくら金がかかってもいいから、さがしてこい。」と、その人はいいました。

ある日のこと、その人は、川魚が食べたいから、釣つてきてくれと、下男にいつけました。

下男は当惑をしました。外を見ると真っ白に雪が積もっていました。どこを見ましても、一面に雪が地を隠していました。その村は、北の寒い国のさびしいところであつたからであります。

しかし、いいだしたうえは、なんでもそのことを通す主人の
氣質をよく知っていましたので、彼は、急に返事をせずに思案を
していました。

「なんで、そんなに考え込んでいるか。そのかわり、もしおまえ
が魚を釣ってきたら、お金をたくさんやる。またおまえのほしい
というものはなんでもやろう。そうすれば、おまえは、家を持つ
て、こんどは主人になることができる。」と、主人はいいま
した。

下男は、そう聞くとまた喜ばずにはいられませんでした。お金
をもらい、品物をもらつて家を持つことができたら、どんなに
しあわせなことだろう。これが夏か、春か、秋のことであつたら、

なんでもないこと、自分じぶんはたのしんで釣つりをするだろう。ただ、いま時分じぶんのような冬ふゆであつては、どうすることもできない。しかし、できないことをするからこそ、そんなにほうびももらわれるのだと考かんえましたから、

「そんなら、釣つりに出でかけてきます。」と、下男げなんは申もうしました。

「一匹ひきでも釣つれたら帰かえつてこい。釣つれなければ帰かえつてきてはならぬぞ。」と、主人しゅじんはいいました。

下男げなんは、いいつけをきいて家うちを出でかけました。その前まえに、彼かれは、いまごろどこをほつてもみみずの見みつからないことを知しつていましたから、飯粒めしつぶを餌えきにして釣つる考かんいで、自分じぶんの食たべる握にぎり飯めしをその分ぶんに大おおきく造つくつて持もつてゆきました。

おがわ
小川は、みんな雪ゆきにうずまっています。また池いけにもいっぱい雪ゆきが積つもっていて、どこが田たやら、圃はたけやら、また流れながであるやらわからなかったほどであります。それに、寒さむさは強つよくて、水みづが凍こおっていました。

げなん
下男は、寒さむい風かぜに吹ふかれながら、あちら、こちらをさまよっていましたが、やっと一ひとすじ筋すぢの川かわらしいところに出でましたので、雪ゆきを分わけて、わずかばかり現あらわれている流れながの上に糸いとを垂たれていました。

「どうか、早はやく釣つれるように。」と、下男げなんは心こころで祈いのっていました。そのとき、一羽わとりの鳥とりが飛とんできて、あちらの森もりの中なかに降おりました。なに鳥どりだろうと、下男げなんはその方ほうを見みていると、ズドンといっ

て鉄砲てつぽうを打うつ音おとが聞きこえました。すると、さつき見みた鳥とりは飛とびあがって、今こんど度ははるかかなたをさして飛とんでいつてしまいました。だれか、打うちそこなつたのだなと思おもつていると、そこへ獵りようし師しがやってきました。

「いまごろ、おまえさんは、なにを釣つつていなさるんだい。」と、獵りようし師しはききました。

「なんとすることはなしに、釣つつているのです。」と、下男げなんは答こたえました。

「こんな川かわに、なにがいろもんか。もつと水みずの深ふかい、日ひ当あたりのいいところではなくては、魚さかなも寄よつてきはしない。」と、獵りようし師しはいいました。

げなん
下男は、そうかと思ひました。そこで糸を巻いて獵師の教え
てくれたような川を探して歩きました。

すると、ある橋の際に、水の深そうな、日の当たるところがあ
りました。そのときは、日がかけていましたが、そこは天気な
らば、きつとよく日の当たるところにちがひありませんでした。

げなん
下男は、ここならだいじょうぶだと思つて、糸を下げていまし
た。そして、一匹でも釣れたら急いで帰ろうと、そればかりを楽
しみにしていましたから、寒いのもあまり感じなかつたのであり
ました。

しばらくすると、ほおかぶりをして、えり巻きをした百姓が、
その橋の上を通りかかりながら彼の釣りをしているのをながめま

した

「おまえさん、こんなところでなにが釣れるものかな。こんな川に魚などすんでいやしない。」と、百姓はいいました。

「ほんとうに、この川には、魚がいらないのですか。」と、下男は、百姓にききました。

「ああ、いやしない。」

「そんなら、どこへいったら釣れましょうか。」と、下男は、絶望して問いました。

「それは俺にもわからないが、いま時分、釣りをするのがまちがっている。」と、百姓はいい残して、さっさと行ってしまいました。

下男は絶望のあまり泣き出したくなりました。また糸を巻いて、そこからあてなく、すぐごと歩きはじめました。

頼りなく思うと、じきに寒さが骨肉にしみこんできました。しかし、彼は、一匹でいいから魚が釣れたときのことを空想して、もうそんな寒さなどは身に感じなかつたのであります。彼は見れない人に出会いました。なんとなく、その人は、なんでもよく知っているように思われました。彼は、さつそく、その人にどの川へいったら魚がすんでいるかをきいたのであります。

「おまえさんは、そんなことを人にきくのはむりというもんだ。考えてみるがいい。だれも目にみえないところにするものを、釣れるとか、釣れないとかいうことはできない。根気ひとつ

だ。釣れるまで待つているよりかしかたがない。」と、その見
れないようすをした人はいいました。下男は、なるほどそれにち
がいないと考えました。

釣れなければ、主人のもとへは帰れないのだから、どこまで
もひとつしんぼうをしてみようと思ひました。

見なれない人は、ゆき過ぎましたが、振り返つて、

「冬は、川よりも池が釣れないのですか。私は、いつか池の魚を
すくつている人を見たことがありますよ。」と、その人はいいま
した。

下男は、釣りについては、あまり知識がなかつたものですから、
そうきくと喜びました。そして、池をさがして歩きました。

やっと池をさがしあてると雪が一面に積もつて水をうずめていました。しかも寒さで、その上は凍つていました。

「ああ、ここでしんぼうをするんだ。」と、下男は思いました。そして、雪を分け、氷を破つて、そのすきまから、糸を垂れました。氷の下には蒼黒い水が顔を見せていました。いかにも深そうに思われたのであります。

彼は、そこにうずくまりました。いつしか雪の上に腰を下ろして、じつと暗い水の上にただよっているうきを見つめていました。いまにもそれが動きはしないかと、そのときばかりを考えていました。

寒い風が空を吹いています。哀れな下男はいつしか疲れてうと

うととなつたかと思つくと、いつのまにか、短い冬の日が暮れてしましました。彼は、夢とも現ともなくうとうととした気持ちになりました。

いくつも、いくつも魚が釣れた。なんと自分自身は幸福なことだろう。頭の上には振りまいたように、金色の星や、銀色の星が輝いている。よく見ると、それは、みんな星ではなく、金貨に、銀貨に、寶石や、宝物の中に自分自身はすわっているのである。もう、こんなうれしいことはない。

彼は、りっぱな家を持って、その家の主人となっていました。あくる日、木の枝でからすがなきました。ちようど彼の頭の上でなっていました。

けれど、彼は釣りざおを握ったままじっとしていました。雪の
上に凍りついて、目はガラスのように光っていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「赤い鳥」

1921（大正10）年4月

※表題は底本では、「北《きた》の国《くに》のはなし」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：富田倫生

2012年5月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北の国のはなし

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>